

昭和二十三年九月二日第三種郵便物認可
平成二十一年五月一日発行
通巻二〇一七号(第)一四一日発行

京鹿子



5月号



— 近 詠 —

雀の枕 丸山佳子

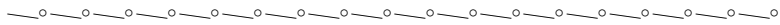
神
様
に
か
し
は
手
控
え
め
抱
卵
中

草
に
し
て
雀
の
枕
や
ふ
れ
見
た
し

お
先
に
と
誰
も
誘
は
ず
二
月
消
ゆ

二
月
消
え
浮
い
た
お
話
誰
か
ら
も





バ
レ
ン
タ
イ
ン
貫
ひ
笑
ひ
に
浪
費
し
て

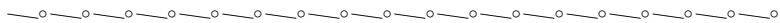
福
相
の
大
葉
牡
丹
に
も
時
が
来
て

佐
保
姫
の
ご
気
性
さ
す
が
こ
の
夕
映
え

エ
レ
ベ
ー
タ
に
一
期
一
会
の
花
粉
ま
み
れ

洗
車
百
円
八
号
線
の
春
す
で
に

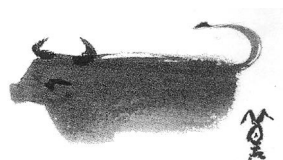
鳥
は
雲
に
何
か
言
ひ
た
げ
望
遠
鏡

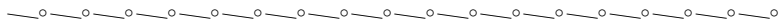


豊田都峰

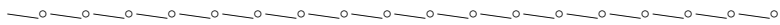
清響集 その九十七

春泥の径幾曲がりして山陵
白嶺を遠くし低くしねこやなぎ
早蕨のまほろば母の在所なる
蝮の道あとはかつてに畦越えむ
遍路ゆくはるかな目路に雲うかべ
遅霜や忘れてをりし見舞状





巢立鳥一山近く晴れわたる
浜風にのりもしてゐる巢立鳥
灯のおぼろその暈うちのたゆたひに
わめくごと芽吹き敗走の径かくす
春風や敗者びいきは母ゆづり
道真の腰かけ石や花こぼる
水ゆたに弟国の野の芽吹きかな
山芽吹き打出の小槌の寺蔵ふ



秀華採集

古草のどこで終ればよいのやら

直江裕子

枯れ過ぎても醜いし、枯れなければいけないし、その度合いに凡てはある。やり過ぎてもいけないし、やらなければいけないし、人生のあらゆる行動は、結局自分が決めることになるのか。

廃屋は土の匂ひや青木の実

竹内久子

ひいらぎの花この奥にかけつぎ屋

鎌田政利

前句の「土の匂ひ」に実相に迫る把握があり、後句の「かけつぎ屋」に風土性を見いだす。そして両句とも、ふさわしい季語をあしらっている。

近 詠

春すずめ

鈴鹿 仁

春すずめ天下分け目のこと知らず
すかんぽや記憶のなかの父と母
陽も風もいくさ語りの春の山
春愁ふ高麗門の風のいろ
文机のおもひ一切花洛の忌
花こぶし比叡の風のさだまらず
舞ひ舞ひて逝く人悼むゆりかもめ

(堀切武雄氏追悼)

神麓集



春日を知らぬは髭の精神科医
野の隅に幻月かかげひそと住み
春眠にやすらふ千年の半跏坐仏
春の闇等身大の人体図
春来てもなほまだ固しフランスパン

新関 一杜

三船祭 林 日圓
新緑の三船祭や大堰川
王朝の大宮人の夕涼み
竜頭船ひと日楽しむ夏の宵
風薫る袂紗さばきや鶴首船
姫君ら十二單で扇流す

ヘルニア手術 北村 香朗
嵌頓の畏れ抱きて寒に入る
冷ゆる廊ドアは静かに手術室
全身麻酔の手術は果てて寒灯
七針の手術の予後や寒明くる
失くしたる指輪現はる春隣

寒牡丹 和田 照海
一幹の竹の籬や寒牡丹
雨よりも風を厭ふて寒牡丹
菰もれ日はなさぬやうに寒牡丹
寒牡丹近き真上はハブ空路
宮崎の畏き宮の寒牡丹

春告鳥 藤岡 紫水
淡墨に尖る川波春浅し
照り返す夕日や比良の名残雪
鶉色に解氷つづく湖の暮れ
老梅に風も会積す宮の杜
春告鳥風の軽さに哺きつる

春遠しいくつになつても回遊魚
冬茜言葉にすれば消ゆるかも
紫の雲の翼に初山河
太箸や忘れられゆく父の膝
冬ざれや例へば色のなき絵の具

松田 都青

神麓集



人日の顔 北川 孝子

言問ひのまなざししかと初比叡
恵方雲八十路の立志おもたかり
手遊びのひとりの煮炊き四月なり
奔放な雲に目覚めし初比叡
手塩かけし人日の顔そろひけり

水仙忌 高木 智

水仙の凛と咲いたり野風呂の忌
雛百詠かがげて偲ぶ水仙忌
季語三つある句もゆかし水仙忌
鶯の慣れよ慣れむと暗き継げり
春泥にたしなめられし気の弛み

蠟 梅 丹生をだまき

枯れがれの芒の原に風の痕
かけてもかけても出ないケータイ寒に入る
ビル一步出て襟立てる虎落笛
乱れ髪かくす都合の冬帽子
透ける黄となりて蠟梅果てにけり

五月の海 竹貫 示虹

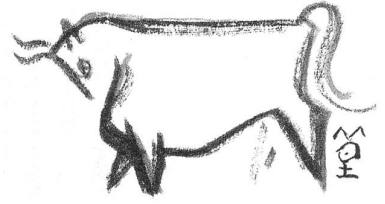
淡麗辛口とは五月の海の色
しらじらと暁け鮎宿の蕎麦枕
蝌蚪に脚白髪 of 髪 of 齡問はれ
若葉風ことば捨てれば軽からむ
八十八夜ほんたうのこと口ごもる

雪 解 柴田 朱美

雪解 霰廟が昏い民話村
下駄の歯を欠かし雪解の石畳
雪解川阿修羅の水をもて余す
雪解 隼人語に飢えし山の家
死に急ぐこともなかりし雪解川

船越 美喜

北窓を開くいいことありさうな
佗助や言はですむこと止めおく
止みしかと思えばまた降る春の雨
喪ごころや開き切れざる冬の薔薇
着脹れて何処へも行かぬ日が続く



京鹿子集

豊田都峰選

冬桜さみしい人にしか見えぬ

たましひの水底にゐて葱きざむ

古草のどこで終ればよいのやら

手袋の片つぼ宇宙の落しもの

薄氷や手頃な棒が見つからぬ

輝ける嶺天に置き齋摘む

妣よりの行平鍋や女正月

茅葺の雨だれの音春隣

風音に紛れ不動の冬の滝

廃屋は土の匂ひや青木の実

千葉 直江 裕子

京都 竹内 久子

人おもふ間とも二度咲桜かな

ひいらぎの花この奥にかけつき屋

雑念を垂るほどくくり戎笹

のつぺらと雪積む墓のない在所

恋札の手搔きの痕や歌かるた

去年の間今年の賀状で返答す

白梅や四十年振り師の記憶

寒の水二度目ないこと師に学ぶ

受験の子異国の地より力水

発見はいつも子が先路の臺

鎌田 政利

伊吹 之博